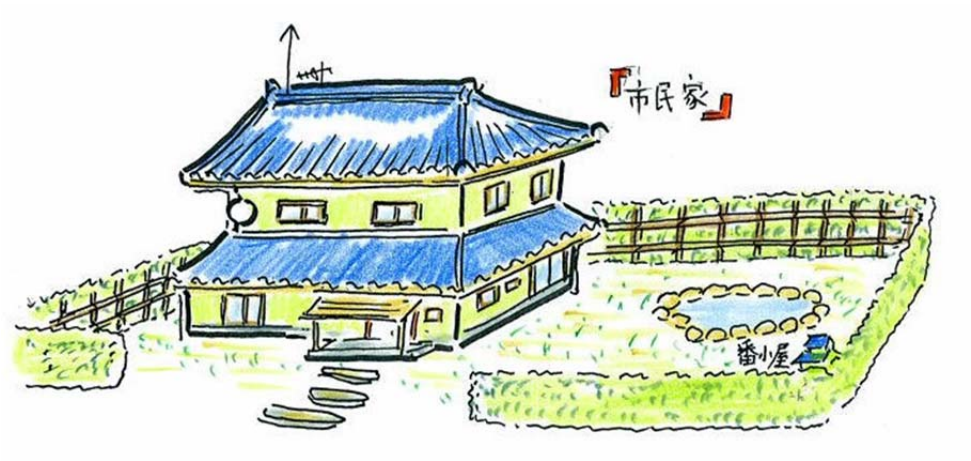
Happy New Year

✦✦支援くんの火災予防奮闘記✦✦

これまでのあらすじ

物語を読む前にまずご覧ください。

物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



仕事は家来の中間 ご助と共に、「市民家」の火災予防の点検を行うことですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事熱心ではないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起こしてしまいます。

そんなご助に手を焼きながら、点検を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年５歳になる市民家の長女 援(えん)ちゃん には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

点得(てんとく)幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き！

援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦労の絶えない支援くんの『火災予防奮闘記』

をどうぞご覧ください。

<u>主な登場人物</u>

援ちゃん　5歳

支援くん　　ご助（中間）

ミーちゃん（飼い猫）

ママ

パパ

閻魔様

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.26

「旦那さま、あけましておめでとうございます。」と、いつになく明るい声のご助に起こされた拙者は、

「おっ？おお、ご助か、お早うさん・・・いや、おめでとう。今年もよろしくな。」と、布団の中から、新年の挨拶をしたのじゃった。

「したがご助、今日はいつになく早い目覚めではないか？」と問いますと

「へへへ・・・そりゃあ『年の初めのためし～とて～♪』と言いやすでしょ。」と答え、妙に畏まった様子で拙者の布団の傍らで正座し、伏し目がちにもみ手を始めたのでござる。

一瞬、ご助の意図が解せなんだ拙者であったが

『・・・ははあん、お年玉か。』と気づいたのじゃが、そこは主従関係をはっきりさせねばと思いましてな

「何じゃ？いつものご助らしくないな。どうしたもみ手なんぞしおって？」と拙者が尋ねますと

「い、いえね。新年でしょ。新しい年が明けましたんざんしょ旦那様。」

「おお、明けたのぉ。」と拙者が気のない声で返すと

「明けたのぉって、そんな気のない声で、いえね、旦那様、年が明けたんですぜ。」と重ねて言い募るご助に

「分っておる。だからおめでとうと申しておるではないか。」と拙者が答えると

「な、何かお忘れではぁ・・・」ともみ手に加え上目遣いに拙者に目配せするご助に

「何か・・・忘れておる？おっ、そうじゃ！」と拙者がこぶしで手を打つと合わせるように

「そ、そうでしょ・・・」と声をあげるご助を見やりながら

「忘れておったわい。ご助よ、済まぬな。」と拙者は立ち上がり、棚の中の手提げ金庫の蓋を開けたのじゃった。

「いえいえ、大丈夫でさ旦那様。」と喜色満面のご助の声の方に向き直ると

「ほれ。」と、お年玉付き年賀はがきを渡したのでござるよ。

「へへぇ」と年賀はがきを押し頂いたご助は、そのはがきを見ながら

「そうそう、これこれ、年の初めはお年玉付き年賀はがきで？ち、違いますぜ旦那様！」

と大声をあげましたのじゃ。

「うん？ 何が違うのじゃ？ 正月じゃろうが。ご助も田舎のおっかさんに年に一度位は便りを出さねばの。そうさなぁ『おっかあ、あっしは素晴らしく優しい旦那様に良くして貰って毎日元気に勤めております。』くらい書いての。」と申しましたのじゃが

「じょ、冗談じゃねえですぜ旦那様。田舎のおっかあとは昨晩もリモートで話しましたぜ。あっしが欲しいのは、お年・・・」と言いかけるのを押しとどめ「ははは、許せご助。そちの欲しいのはこれじゃな？」と再度手提げ金庫から人生ゲームの千ドル札を５枚取り出すとご助に渡したのでござるが、

「へへぃ、旦那様。良いんですかい５千ドルも・・・じゃねぇってんだ！」と、

とうとうご助めは怒りはじめましてな。

「旦那様、いいやもう旦那様じゃねぇやい、やい、こらっ支援！！よくもまあ

これまで十(とお)以上も年上のあっしを顎でこき使いやがって・・・」とのご助の怒

りは、拙者が手に持ったポチ袋を認めると途端に

「こき使って頂き有難うごぜぇやす。」とトーンダウンしたのじゃった。

「ほれ、お年玉じゃ。」と言うと拙者は「キタザトシバサブロ」が描かれた千円札が入ったポチ袋を渡したのじゃ。

「有難うごぜぇやす。今年も主家のため、旦那様のため、滅私奉公させて頂きます。」と言いながら中身を改めたご助は「な、何でぇ、偽札じゃねえですかいっ。野口さんとも前の夏目さんとも絵が違いますぜ。もうようがす、今日、あっしは休ませていただきやす。番小屋で甘酒引っかけて寝正月でぃ。」と、ポチ袋を投げ捨て走り去ろうとしたのでござるよ。

「こ、これ何をするのじゃご助。これは今日から使える新札なんじゃぞ。」と声を掛けますと、ヒラリと燕返しの要領で踵を返したご助は、地に着く寸前のポチ袋を拾い上げると恭しく押し頂き、今一度、新札をシゲシゲと見ながら

「ねえねえ旦那様。どうしてお国のお札はこんなに絵が変わるんですかね？」と拙者に聞いてきたのでござる。

「うっ、うん？何故変えるか・・・じゃと？」と拙者が答えに窮しておると

「・・・旦那様にも分からないことがあるんですかい？」と上目遣いに覗き込みおって。

「ええい・・・」と怒りの声をあげようとした刹那、お屋敷の方から

「えん！待ちなさい、えんっ！！」と奥方様のお声が・・・。

すわ、大事の出来(しゅったい)か？と拙者達はお屋敷へ・・・。

　拙者達が座敷にたどり着いたところへ奥方様に追いかけられた援姫様が駆け込んで来られたのじゃ。

「イヤーっ、こりは・・・も、もらったのぉ」と叫びながら逃げる姫様の手にはしっかりと新千円札が握りしめられておるのを拙者もご助も見逃さなかった。

「何言ってるの。先週からコソコソと何をしているのかと思ってたらそんなもの作ってコンビニで買い物しようとするなんてぇ信じられない。偽札づくりは大変な犯罪なのよ！３年以上の懲役よ！！」と怒り狂う奥方様に

「ち、違うの。こりはご助が作ってえんに呉れたの。それと、えんちゃんはちょーえきでも良いからアイスクリーム食がべたかったのっ」と姫様。

これにはご助も手にした新札・・・いや、偽札をポロリと落とすしかなかったようで・・・。

「だ、旦那様・・」と拙者の方を見ましたのじゃが・・・。

不覚にも拙者の方は、ワナワナと震える手で手提げ金庫の中の数枚の新札、いや、偽札を握りしめ「あわわわ・・・もう旧札は使えなくなると姫様に言われ、野口さんの千円札と交換したというのに･･･」と我を忘れておったのじゃった。

そんな拙者を哀れな目つきで見ながら

「駄目だこりゃ。」とつぶやくとご助は偽札を援姫様が書き損じた書初めとともにゴミ箱へ捨てたのじゃった。

　こうして拙者達の散々な新年は失意のうちに松の内も明けて、天徳院の境内でも左義長が行われる日がやって参りましてな、拙者達は援姫様に付いて会場に向かったのですじゃ。

会場に着くと左義長を仕切る消防団員から

「お飾りと書初めだけだよ。年賀状とか入ってないね？」と聞かれた姫様が

「はいってにゃい。」と答えるとその消防団員は

「よぉし。ほれぇ。」と習字や正月飾りの入ったとゴミ袋を燃え盛る炎の中に

投げ入れたのじゃった。

炎が大きくなり、めらめらと燃え上がると、その中から一枚のお札のようなものが燃えながら空高く舞い上がっていった。ご助が捨てた偽札じゃった。

「な、なんじゃありゃ？」と消防団員が驚くほどの速さで舞い上がった偽札を指さすのと同時に

「い、いかんっ。火の付いたまま何処かに落ちたら火事になるぞ！ご助、追うのじゃ。」と拙者は叫んでおった。

「だ、旦那様、も、申し訳ねぇ・・・あ、あれはあっしが・・・」と叫ぶご助に

「そんなことはもう良い！火事を防ぐのじゃ。」との拙者の声に

「合点承知の助でさ。」と答えるご助。

「ふふふ、ようやく防火の精の姿を取り戻したか。」と頼もしく見やると、いつの間にか拙者達に交じって偽札を追いかける姫様の姿が・・・。

「ほおぉ、姫様も責任を感じて・・・さすが拙者らの主様よ。」と感心したのじゃったが・・・

「ちえん、ぼすけ、全部燃える前に早く捕まえるのぢゃ。半分残っておれば札は使えるのぢゃ。それでアイスクリームを買うのぢゃ。」と全力で走る姫様に、拙者は走るのを止めたのでござるよ。

（おしまい）